『資本論』綱要 他

●フリードリヒ・エンゲルス著
●宇佐美誠次郎、宇高基輔訳

国民文庫＝8　大月書店

国民文庫

8

〔新訳〕

『資本論』綱要

他九篇

エンゲルス著

宇佐美誠次郎
宇高基輔 訳

大月書店

凡　例

一　本書は、一九五三年十一月に初版を発行したが、その後、『マルクス＝エンゲルス全集』（ディーツ版）の発行にともない、版をあらため、『同全集、第一六巻』のなかから、エンゲルスの『資本論』第一巻綱要と『資本論』第一巻の書評九篇を収録したものである。

一　訳文は、『マルクス＝エンゲルス全集、第一六巻』（大月書店版）を転用した。

一　本文中、全集とあるのは、『同全集』（大月書店版）のことである。

一　本文中、傍点を付した部分は原文のイタリック体を、ゴシックの部分は原文の隔字体または**ゴシック体**を示す。

一　丸括弧（　）は原則としてエンゲルスのもの、※印を付した注もエンゲルスのものである。

一　本文中、右わきにある小さな括弧内の通し番号（一）（二）……は、ディーツ版編集者の注解を示す。この注解は、巻末に一括してかかげた。ただし、この通し番号は、本書用に新たにつけなおしたものである。

一　訳者注は＊印を付して文章の段落末にかかげた。

一　本文中、角括弧〔　〕でかこんだ小活字部分は、短い訳者の補足を示す。

一　訳者の分担は、『資本論』第一巻綱要が宇佐美誠次郎、『資本論』第一巻の書評が宇高基輔である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目　次

『資本論』第一巻〔綱要〕

第一部　資本の生産過程……一
第一章　商品と貨幣……一
一　商品そのもの……一
二　商品の交換過程……一四
三　貨幣または商品流通……一七
A　価値の尺度（金＝貨幣と前提する）……一七
B　流通手段……一九
（a）　商品の変態……一九
（b）　貨幣の流通……二一
（c）　鋳貨――価値章標……二三
C　貨　幣……二四
（a）　貨幣蓄蔵……二四

(b) 支払手段……二五
(c) 世界貨幣……二七
第二章 貨幣の資本への転化……二八
一 資本の一般的定式……二八
二 一般的定式の矛盾……三三
三 労働力の売買……三六
第三章 絶対的剰余価値の生産……四〇
一 労働過程と価値増殖過程……四〇
二 不変資本と可変資本……四三
三 剰余価値率……四六
四 労働日……四七
五 剰余価値率と剰余価値量……五三
第四章 相対的剰余価値の生産……五六
一 相対的剰余価値の概念……五六
二 協業……五八
三 分業とマニュファクチュア……六三
四 機械と大工業……六八
(a) 機械それ自体……六八

(b)　機械による労働力の取得……七三
(c)　古典的な姿における工場全体……七六
(c′)または(d)　工場体制および機械にたいする労働者の闘争……七七
(c″)または(e)　機械と剰余価値……七九
五　剰余価値の生産についてのさらにすすんだ研究……八二

『資本論』第一巻書評

『ツークンフト』のための『資本論』第一巻書評……八五
『ライン新聞』のための『資本論』第一巻書評……九〇
『エルバーフェルト新聞』のための『資本論』第一巻書評……九六
『デュッセルドルフ新聞』のための『資本論』第一巻書評……九九
『ベオバハター』のための『資本論』第一巻書評……一〇二
『ゲヴェルベブラット・アウス・ヴュルテンベルク』のための『資本論』第一巻書評……一〇六
『ノイエ・バーディッシェ・ランデスツァイトゥング』のための『資本論』第一巻書評……一一〇
『デモクラーティッシェス・ヴォッヘンブラット』のための『資本

論』第一巻書評……二四
『フォートナイトリ・レヴュー』のための『資本論』第一巻書評……二三五
注　解……二五九

カール・マルクス

『資本論』第一巻〔綱要〕(一)

一八六八年に執筆
手稿による

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

第一部　資本の生産過程

第一章　商品と貨幣(一)

一　商品そのもの*

資本主義的生産が支配している諸社会の富は諸商品からなっている。商品は使用価値をもつ一つの物である。使用価値はすべての社会形態のなかに存在しているが、資本主義社会においては、使用価値は同時に交換価値の素材的な担い手である。

交換価値は、それを計るための一つの比較基準〔tertium comparationis 字義は「比較のための第三者」〕――交換価値の共通の社会的実体である労働、しかも、交換価値のなかに対象化されている社会的に必要な労働時間――を前提している。

＊　全集、第二三巻、四九―九八（原）ページを参照。

商品が二面的なもの、すなわち使用価値および交換価値であるように、商品のなかにふくまれている労働も二面的に、すなわち一方では織布工や裁縫工などの労働のような一定の生産的な活動、「有用的労働」として、他方では人間労働力の単純な支出、凝結した抽象的労働として、規定される。前者は使用価値を生産し、後者は交換価値を生産するが、量的に比較できるのは後者だけである（熟練労働〔skilled〕と不熟練〔unskilled〕労働、複雑労働と単純労働との区分がこのことを立証している）。

つまり交換価値の実体は抽象的労働であり、交換価値の大きさは抽象的労働の時間的長さである。次には、交換価値の形態を考察しなければならない。

（一）x量のa商品＝y量のb商品　他の商品の使用価値で表現された一商品の価値は、その商品の相対的価値である。二つの商品が等価であるという表現は相対的価値の単純な形態である。右の方程式において、y量のb商品が等価物である。この等価物において、x量のa商品はその商品の現物形態と対立する価値形態を獲得するが、同時にy量のb商品はその現物形態のままで、直接的な交換可能性という属性を獲得する。交換価値は、一定の歴史的諸関係によって商品の使用価値の上に刻印されたものである。それゆえ、商品は、みずからの使用価値によって交換価値を表示することはできず、他の一商品の使用価値によってのみそれができる。二つの具体的な労働生産物が等置されることによってはじめて、両生産物のなかにふくまれている具体的労働の抽象的人間労働としての属性が現われてくる。すなわち、一つの商品は、それ自身のなかにふくまれている具体的労働にたいしてではなく、他の商品種類のなかにふくまれている具体的労働にた

いしてだけ、抽象的労働の純然たる実現形態となることができる。

x量のa商品＝y量のb商品という方程式は、x量のa商品が他の諸商品によっても表現できるということを、必然的にふくんでいる。つまり

(二) x量のa商品＝y量のb商品＝z量のc商品＝v量のd商品＝u量のe商品＝等々である。これが展開された相対的価値形態である。ここでは、x量のa商品は、もはや一つの商品とだけでなく、それ自身によって表示される労働の単純な現象形態として、すべての商品と関連をもつ。この方程式を逆に置き換えるだけで、

(三) 相対的価値の第二形態を転倒した形態ができる。すなわち

y量のb商品＝x量のa商品
v量のc商品＝x量のa商品
u量のd商品＝x量のa商品
t量のe商品＝x量のa商品
等々。

ここにおいて、諸商品は一般的相対的価値形態を獲得する。この価値形態において、諸商品は商品としてその使用価値を捨象し、抽象的労働の化身としてx量のa商品と等置される。x量のa商品は、他のすべての商品にとっての等価物の種属形態であり、すべての商品の一般的等価物である。そのなかに物化されている労働は、そのまま、抽象的労働の実現として、一般的労働として通用する。しかし

（四）これら一連の商品はそれぞれがまた一般的等価物の役割を受け持つことができる。ただいつでも、これらの商品のうちその役割を受け持つことができるのは一つの時期には一つだけである。もしすべての商品が一般的等価物であるなら、またそのうちのどれもが他のものを排除してしまうからである。第三の形態は、x量のa商品によってではなく、他の諸商品によって客観的につくりだされたのである。つまり、一定の商品がこの役割をひきうけなければならないのであり――時によってそれは替わりうる――、それによって商品はじめて完全に商品となる。一般的等価形態がその商品の現物形態と合生する特殊な商品が貨幣である。

商品についてのむずかしさは、資本主義的生産様式のすべての範疇と同じように、それが、人的関係を物的外被のもとで表示するという点にある。生産者たちは、彼らの生産物を相互に商品として関連させあうことによって、彼らのさまざまな労働を相互に一般的人間労働として関連させあう。――このように物の媒介によらずには、彼らはこの関連を完成することができない。つまり、人間の関係が物の関係として現われるのである。

商品生産が支配している社会にとっては、キリスト教、とくにプロテスタンティズムが、ちょうどふさわしい宗教である。

二　商品の交換過程*

＊　全集、第二三巻、九九―一〇八（原）ページを参照。

商品が商品であることは、交換において証明される。二つの商品の所有者たちはそれぞれ自分の商品を交換しようとする意思をもち、したがってお互いに私的所有者として認めあわなければならない。契約をその形態とするこの法的関係は、経済的関係がそこに反映している意思関係にすぎない。法的関係の内容は経済的関係そのものによってあたえられている。四五ページ。*

＊『資本論』初版のページ。全集、第二三巻では九九（原）ページ。以下〔　〕内に全集、第二三巻の原書ページを示す。

商品は、その非所持者にとっては使用価値であり、その所持者にとっては使用価値ではない。それだからこそ交換の欲望がおこるのである。しかしどの商品所有者も、自分に必要な特定の使用価値を交換で手に入れようとする――そのかぎりでは交換は一つの個人的過程である。他方において、彼は自分の商品を、価値として、つまりどれでも任意な商品で――他の商品の所持者にとって彼の商品が使用価値であろうとなかろうと――実現しようとする。そのかぎりでは交換は彼にとって一つの一般的社会的過程である。だが同じ過程がすべての商品所有者にとって、個人的であると同時に一般的社会的であることはできない。どの商品所有者にとっても、彼の商品は一般的等価物とみなされ、他のすべての商品は彼の商品の多種多様な特殊的等価物とみなされる。すべての商品所持者が同じことをするのだから、どの商品も一般的等価物ではなく、したがってどの商品も、互いに価値として等置され価値量として比較されるための一般的な相対的価値形態をもたない。したがってまた、諸商品は一般に商品として相対するのではなく、ただ生産物として相対するだけである。四七〔一〇一〕ページ。

諸商品は、一般的等価物としてのある一つの他の商品に対立的に関係させられることによって

のみ、はじめて価値として、それゆえまた商品として、互いに関係しあうことができる。しかし、ただ社会的行為だけが、ある一定の商品を一般的等価物――貨幣にすることができる。

商品の内在的な矛盾――使用価値と交換価値との直接的統一としての、有用な私的労働の産物であり……また抽象的人間労働の直接的社会的な化身としての――この矛盾は、商品と貨幣とへの商品の二重化という形をとるまでは、すこしも休もうとはしない。四八ページ〔一〇二ページ。ただし現行の版とは異同がある〕。

他のすべての商品は貨幣の特殊的等価物であるにすぎず、貨幣は他の諸商品の一般的等価物であるから、他の諸商品は、一般的商品としての貨幣にたいして、特殊的商品として相対するのである。五一〔一〇四〕ページ。交換過程は、それが貨幣に転化する商品に、その価値をあたえるのではなく、その価値形態をあたえるのである。五一〔一〇五〕ページ。――呪物崇拝。一商品は、他の諸商品が全面的に自分の価値をこの一商品であらわすから、はじめて貨幣になるとは見えないで、逆に、一商品が貨幣であるから、他の諸商品がその価値をこの一商品であらわすように見える。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton